

障がい者が災害時に安全・安心な生活を送るためには

3年2組3番 大倉沙恵
3年3組11番 佐保野いずみ

Keyword:「災害」「避難所」「障がい者」「コミュニケーション」「支援ツール」

1. はじめに

2024年に発生した能登半島地震のニュースや記事を見た際に、障がい者が避難所生活の中で苦労していることを初めて知った。近い将来、南海トラフ地震が起こった際に、身近に障がい者がいる私たちは同じ状況に陥る可能性が高いと考え、この問題を自分事として捉え、2年間探究した。

2. 序論

(※1)

本探究では、障がい者が避難所で安心して過ごせる環境を作るため、コミュニケーション支援の向上を目指す。まず、現状を理解するため、能登半島地震の際に現地で復興活動をされていたIVUSAの方にインタビューを実施した。そこから、地震発生時、障がい者は設備の整った福祉避難所に移ることが想定されていた。しかし、被害が予想以上に大きかったため、右の表からわかるように開設は一部にとどまり、多くの障がい者は学校や公民館などの指定避難所で生活していたことが分かった。また、新聞記事からは、避難所での地域住民との共同生活の中における苦労も明らかになった。

自治体	平時に確保していた 福祉避難所数	1/8時点で開設された 福祉避難所数	開設された最大の 福祉避難所数(4/1時点)
七尾市	24	0 (0%)	3 (13%)
輪島市	24	4 (17%)	10 (42%)
珠洲市	7	0 (0%)	2 (29%)
志賀町	8	1 (13%)	2 (25%)
穴水町	3	3 (100%)	3 (100%)
能都町	5	2 (40%)	7 (140%)
合計	71	10 (14%)	27 (38%)

そこで、障がい者の避難所生活をサポートするツールがないかインターネットで調べたところ、神奈川県相模原市で会話を支援するボードが活用されていることを知った。しかし、それは簡潔である一方で汎用性に乏しいと感じた。

次に、指定避難所となる国際高校の災害備蓄品について調べてみた結果、マスクやティッシュなどの生活必需品はあったが、障がい者に特化したものはなかった。さらに、奈良県の災害時の取り組みについて防災・危機管理課に問い合わせたところ、現段階では障がい者に緊急時の情報を提供するために事前にラジオを配布する取り組みが行われていることが分かった。しかし、避難所生活に特化した支援ではなく、障がい者が避難所で安心して生活できる環境が十分に整っていないという課題も見えてきた。

避難所生活における最大の困難はコミュニケーションである。そして、私たちは高校生として直接的な活動は難しいが、間接的に支援することは可能であると考えた。そこで、私たちは障がい者が避難所で円滑にコミュニケーションを取るためのツールを作成することを目指した。

○方法

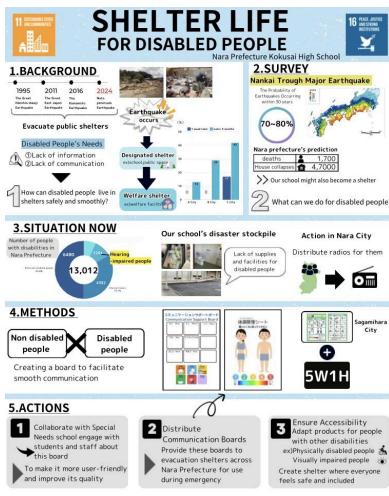
私たちは聴覚障がい者向けの会話を支援するコミュニケーションサポートボードを作成した。このボードの最大の特徴は5W1Hを用いたことだ。例えば配給が、いつ、どこで、どのように行われるか正確に伝わるようにマグネットを使って単語を組み合わせることで誰でも簡単に使うことができる。

3. 本論

○外部での発表

(※2)

第一に、立命館アジア太平洋大学で海外から来た学生にこの探究について発表を行なった。その際、日本と海外で地震についての関心や経験の差があることがわかった。改善として、英語表記も加えることで日本に来ている外国人にも対応できるようにした。第二に、学校外での発表を通して様々な意見を取り入れるため、私たちは全国から高校生が集まる「2024年度全国高校生フォーラム」に出場した。私たちは「災害発生時に誰もが安全に避難するために私たちができるることは何か」についてのポスターセッションや well-beingについてディスカッションを行い、多くの人に現状を知らせる機会となった。第三に、大阪公立大学・吉田敦彦教授の授業の「人間形成論」で発表を行なった。障がい者をテーマに 探究している大学生や教授から、「誰もが使いやすくするためにサイズを一回り大きくするべき」「使用者だけでなく、見る人全てにとってわかりやすいボードにするべき」など、新たな視点からの助言や指摘を受けた。私たちのテーマを専門としている方からの意見だったため、客観的なもののが多かった。第四に、第13回奈良県高校生議会に出場し、「災害時に障がい者が安心して暮らせるように」という提言を行なった。資料では、能登半島地震、障がい者の避難所生活が困難だったこと、避難用での会話や情報伝達が円滑に進めることができなかつたことを強調し、その解決策として、障がい者の意思を代弁して伝えることができるコミュニケーションサポートボードの普及を奈良県知事や県議会議員、教育長に訴えた。提言を行う中で、社会に発信し提言を実現していくことの難しさを実感した。



○外部への訪問

第一に奈良県立ろう学校を訪問し、コミュニケーションサポートボードを使い、実際に災害が起こったことを想定したロールプレイングを行った。その場で提案された新しい考え方や要望を訊き、サイズを大きくしたり、体調管理シートの背面バージョンも作る改善を行なった。また「障がい者だけが意思表示するのではなく、避難所にいる周りの人からも障がい者に質問できるボードも必要」という意見もでた。耳が聞こえないからこそわかる困難なことや要望がどれも実生活に基づくものが多く、貴重な機会となった。第二に、障がい者がいる施設で実際に使用してもらう一般社団法人「eight」を訪問した。そこで、「支援ツールを作るだけではなく、誰もが使える体制を作らなければならない」と指摘を受けた。今まで、ツールを作成することばかり考えていたが、体制については目を向けていなかったため、新たな課題を見つけることができた。また、実際に障がい者に向けて現在使用してもらっている。

(※3)



4. 結論

(※4)

これらの活動を踏まえて、私たちはコミュニケーションサポートボードを完成させ、また2つのことを学んだ。1つ目は、作るだけでなく、使用してもらうために広げることが大切だということだ。作るだけでは考えた方法を有効活用することができないということに気づいた。そこで、様々な場所で発表を行い、少しでも知ってもらおうと努めた。その実践が、私たちの探究において最も重要な要素だったと考える。2つ目は、実際に関係者の方に専門的な話や率直な感想を聞くことができたことだ。特に使用感やデザイン性などは主観的になりやすいので、直接聞くことによってより良いものにできたと考える。

しかし、もう学校での活動が1回きりで終わってしまったことが反省点だと考える。今後は、改良版の提案内容を共有して、使用的機会を増やせるよう計画を立てたい。また、使用後の感想を元に、更なる改善を加えることの必要性を感じることができた。

今後は、聴覚障がい者だけでなく、他の障害をもつ方にも対応できるツールを作っていくと考えている。私たちは、コミュニケーションサポートボードの製作が、今後30年以内に発生すると言われる南海トラフ地震への備えの第一歩になると考えている。地域の避難所では、たくさんの人が共同生活を行う。だからこそ、障がい者や高齢者、子供またその家族など柔軟で幅広く対応できるものを作成しなければならない。

5. おわりに

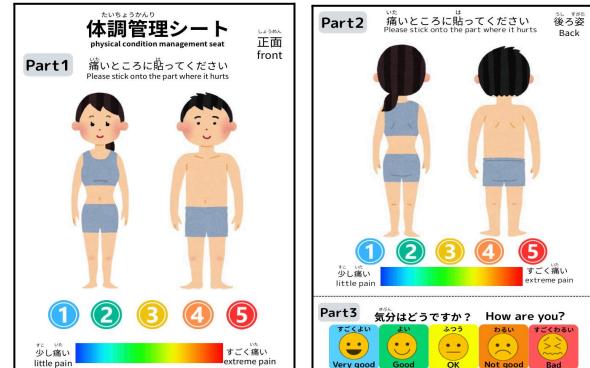
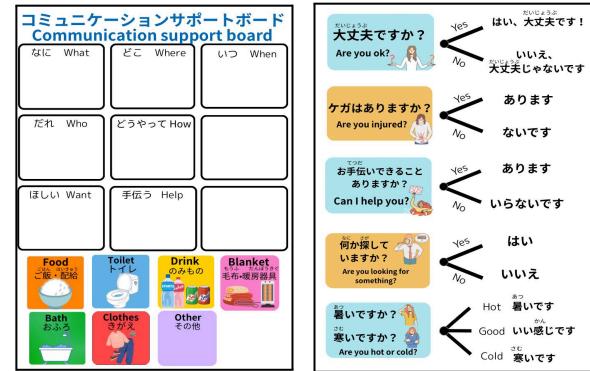
私たちはこの探究を通じて、多くの人に知ってもらうことや、様々な場所で発表することで鋭い指摘や客観的な意見をいただき、より良いものに作りあげる重要性を学んだ。さらに発表の場では新たな繋がりを得ることができ、より探究を深めるためには、私たちの努力だけではなく周囲との協力が欠かせないことにも気づくことができた。これらの学びや気づきは、大学での研究でも活かすことができると考え、学んだ知識や経験を社会貢献にも繋げていきたい。

(※1)能登半島地震の際の福祉避難所開設率

(※2)2024年度全国高校生国際フォーラムで使用したポスター

(※3)奈良県立ろう学校でのロールプレイングの様子

(※4)コミュニケーションサポートボード



6. 参考文献・出典

- ・NPO法人国際ボランティア学生協会IVUSA
- ・NHKニュース 「ひとりで移動できない」避難所で想像もしなかった苦労が
<https://news.web.nhk/newsweb/na/na-k10014363571000>
- ・相模原市
<https://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/kosodate/fukushi/1026641/1031327.html>
- ・国土交通省 <https://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/r01/hakusho/r02/html/n1222000.html>